

現代の「棄民」を生んではならない 松井政就の見たハツ場ダム問題

群馬県長野原町に建設が予定されているハツ場ダム建設予定現場を取材してきました。

民主党に政権が交代したことで建設中止の判断がくだされる見通しとなり、いま社会の注目を集めています。この日は平日にもかかわらず、現場周辺には県の内外から一般の見学者も多数多く訪れていました。関係者の話では最近の見学者数は従来の3倍以上に増え週末には1000人を上回るとのこと。人々の関心の高さがうかがえます。

ダム建設現場に到着してまず目に入るのが、度々メディアで取り上げられている巨大な「橋脚」です。大きさが目立つために映像として紹介されやすいのですが、これはダム本体ではなく、ダム湖の上を渡す



道路のためのものです。ダム本体は未着工のまま中断されている状況です。

かけがえのない自然と水の安全との板挟み

ダムサイトと呼ばれる水没地に降りてみますと、美しい自然に目を奪われます。これほど美しい自然がダムに水没するといつイメージ

ジは、なかなか想像がつかせません。名勝として知られている「小蓬菜（しょうほうらい）」は中国の水墨画を思わせる美しい姿です。



こうした美しい自然を守ろうと、地元の人々は数十年にわたって必死でダム建設に反対してきました。しかし下流の群馬から「治水や利水のため」にどうか作らせてほしいと懇願されるかたちで涙をのんで建設を受け入れ、周辺工事もおおかた終わり、いよいよダム本体に着工という段階を迎えています。



小蓬菜のすぐ横には排水用の巨大トンネルが出来上がっていて、美しい自然とはミスマッチの姿を見せています。

川原湯温泉街に来てみました。こちらもダムが出来れば水没する予定です。

心休まる風情ある通りが続いています。ダム計画にともなう店を営んでいた人々は次々とこの場所を去り、温泉を除けば酒店は一軒、食堂も一軒といたいへん寂しい姿になってしまっています。



酒店を営む七八歳の女性は、何年も何年も反対してきて、下流の人たちのためにと仕方なく受け入れました。それなのに半分以上の人が町の外に出て行ってしまった後になって、今度は突然、中止になっ



た。人がいなくなつてしかも湖もなくなつてしまつては、温泉はお客さんも呼べない生活もできません。どうしてみんなが残っている間にちゃんと決断してくれなかったのでしょうか？」

辛そつに語る姿に言葉を失いました。住人のほぼ全員が、当初はダムに反対していましたが、しかし長い年月にわたる説得の未断腸の思いで同意をし、生まれ育った思い出の土地を手放し、新たな町づくりに頑張ろうとよつやく希望が持てた頃になつて、今度はそのダム自体がまるで意味のない悪の象徴であるかのように言われはじめてしまいました。

住人の方々にとってはまさに国に騙されたような気持ちです。政権が変わつたからという一言では、とつてい済まされぬ事態です。

ダム中止であれば、生活代替地の再検討は必須事項

住民が新たな生活を始める予定の移転先を訪れました。これはダム湖を取り囲む山の中腹に造成されつつあります。着々と工事が進められ、すでに何軒かの住居が移転し、生活を始めている方もいます。

ところが現場を見ると大きな問題に気がきます。

代替地はダム湖の水位が一六メートルの高さになることを大前提として作られているため、山の中腹を切り開く格好で造成されている点です。



人間の生活は基本的に水の近くで営まれるものから、新しい町も、ダム湖の湖畔に立ち並ぶ住宅や温泉街といった想定で設計されているのだ。

新しい町の完成予想図にも湖畔の温泉町」という設計の意図がちんと表現されています。



しかしダム湖が出来ないとなれば、何もないう山の中に、新たな集落がポツンと取り残されることになるかもしれません。まるで「山中の孤島」です。実際にその場所に立ち、人々が暮らす姿を想像してみましたが「あまりに気の毒過ぎる」というのが正直な感想でした。周辺工事のみを終わらせただけでダム本体の工事が中止され、生活の代替地も今のままだと仮定すると、残された住民の生活が非常に不便なまま、棄てられたと同然の姿で



放置される危険性が高いと言えます。

無理な輸えかもしませんが、その姿はまるで開腹手術の最中に病院が倒産したからといって、手術を途中で中断し、血が溢れる傷口が開いたままの患者を放置して医者が帰ってしまったような姿」をイメージさせられます。

前原国土交通大臣は、住民の方々の生活基盤をきちんと整えようと発言していますが、もし中止する場合は生活の代替地の案そのものを根本的にゼロから作り直すくらいの対処をして、住民の方々が不便を強いられないよう手厚く保証しなければならぬと思います。

その後県土整備部を訪問し、ハツ場ダム計画に至った元の経緯と、現在把握されているデータについてのデータを説明していただきました。

メディアでは、国が出してきた根拠があったかも全ておかしいかのように扱われることがあります。しかし、こちらでお聞きしたデータには、信憑性のあるものも多く含まれていました。

私はできる限り公平な立場から賛否双方の話を書くよう努めています。現場を歩いて確かめた結果思ったことは、メディアで報じられている話には、事実確認もありません。ダム中止こそ正義」という一方的な傾向が見られるなど、必ずしも公平な報道がなされていないと感じています。

事実を正しく伝えないと更なる悲劇を生む

たしかに過去において、ダムありきで根拠が年を追うごとに変わってしまった例もあることから、国が出してきた根拠を頭ごなしに疑う風潮もあります。

しかし一部のメディアでは、地元とはまったく関係のない活動家の人間を、地元住民と偽って登場させ、根拠の薄い数字をしゃべらせ、誤った方向に人々の意識を誘導させているケースさえあるのです。

これは、問題の本質を歪め、事実誤認を招く非常に危険な行為で、決して許されないものです。

どんな問題にも共通しますが、メディアでは反対運動が多く報じられます。そもそも賛成の人が敢えて運動を起すことは滅多にありませんから、反対派ばかりが過剰に目立つのは当然です。

だからこそ、問題が起きている現場に足を運んで、実態を自分の目で確認しなければならぬと思うのです。

ところが今、地元の関係者に対してダム建設を中止しろ」という抗議の電話やメールが全国から殺到しています。

その多くは、地元の実情を知ることか、たんにメディアの流す偏った二次情報を真に受けた無関係の人たちからのものです。そんな無責任な意見ではなく、ダムによる防災や水利権などに直接関係する下流都県の人やダム建設によって生活形態の変更を余儀なくされる地元の人々の現実が最優先されなければなりません。

民主党が選挙で勝ち、マフレストの中にハツ場ダム中止というテーマが含まれていたからといって、ハツ場ダムを巡って選挙が争われたわけではまったくありません。

なぜそう言えるかというと、先の衆議院選で民主党は全国に候補者を数多く擁立したにもかかわらず、この地元の選挙区には一人も候補者を立てなかったからです。

つまりこのダム問題に対して住民が意見を言えるチャンスが奪われてしまったのです。メディアはそうした事実を報道していません。

この問題に直接的な関係をもたない多数

の意見によって、現場で生きる人々の辛い現実が後回しにされるとしたら、いわば数の暴力となってしまう。民主主義にも地方分権にも反します。

中止でも続行でも重要なのは信頼に足る根拠

実に難しい問題です。

一か〇かで一刀両断できる対象ではありません。住人の生活面、そして治水利水の面など、事情が複雑に絡み合っています。政権交代前の政府（国土交通省）が発表してきた投資対効果は三、四倍とされていますが、中身をよく読んでみると、論理的とは言えない数字が並んでいることも事実です。むしろ、ダムありきで、後付けで根拠を作り上げるようなことはあってはなりません。感情論で判断することもいけません。

ダムを建設すべきか中止すべきか。どのような判断を下すとしても、その根拠が信頼できるものでなければ、問題は更なる問題を誘発しかねません。

本来どつあるべきかを考え、その上で、現実とその場所に暮らす人々の生活をどう守っていくかを、きちんとした根拠をもって冷静に誠実に考えていかなければならないと、現場をこの目で見て、強く思いました。

松井政就（作家）

Copyright©2009.10.21 Masanari Matsui

問い合わせ先 office.tik@gmail.com
HP www.tiklab.jp